明らかにしてゐてそれ〴〵に高く評價せらるべきものであるが、しかもそのうちにあつても角田文衞氏の執筆に成る國分寺の寺院組織の一編は、全國の遺蹟に關する知見並びに豐富なる文獻史料蒐集に依つて國分寺の規模及び機能を伽藍・宗旨・佛像・僧尼・法會・經濟の六項に分けて究明した點に於いて特に推賞せらるべきものであらう。併し乍ら文獻遺蹟の兩者を據證とする歷史考古學の立場はその兩者の示證力が本來性質を異にすることに依つて、困難なるものをそのうちに持つてゐるのを見逃し得ない。國分寺に關する問題のうちでも至難なものは設置の詔勅の解釋であるが、角田文衞氏は室町時代の文書に國分寺を記して「こくぶ寺」とすることを始めとして、天平十三年以前に各國衙の附近に寺院が存し、詔勅に依る法會が國廳に於いてではなく寺院に於いて勤修せられたことを指摘して、國分寺以前に國府寺なる寺院が各國衙に附屬してゐたことを主張し、それを裏付けるものとして現在の遺蹟のあるものよりは天平以前と認めらるゝ古瓦の出土する事實をあげてゐる。この主張は極めて示唆多きものであるが、しかも猶現在の文獻的史料に於いては確證を見出し得ず古瓦のみを以つてしては確然たることを云ひ得ないものとせねばならぬ。この困難のために氏の立論は稍論旨の徹底を缺いてゐるが、將來この問題を解決するものは遺蹟の徹底的調査以外に恐らくはないものと思はれる。その意味に於いてこの書の編纂は國分寺研究の將來に向つて新たなる問題を提供したものと云ふべきものであらう。（考古學研究會發行、本文一、七五九頁、獨文一一頁原色版一頁、圖版コロタイプ百頁、挿圖五一〇頁、上下二册、價格四拾圓）〔赤松俊秀〕

石門心學史の研究

石川　謙著

享保の昔市井の一商人學者石田梅岩によつて創められた所謂石門心學の教へが、その平易にして捕はれるところなき教理と、その門弟等の熱心にして組織ある布教方法とによつて、幕末に至るまで二百年の間廣く全國に流布し社會のあらゆる階級に信奉せられて、よく國民道德の向上、社會風教の維持に貢獻するところあつた事は、日本思想史或は教育史の上に於ける最も著しい事象として夙に人々の注意するところであり、古く足立栗園氏の「心學史要」をはじめ、白石正邦氏の「石門心學の研究」等既にいくつかの論著が公にされてゐる。併しながらそれらの研究は多くは唯心學者の一々の著述に見はれた思想を當時の一般思想所謂神儒佛いづれかの一分派として簡單に理解するか、或は社會の階級的構造に卽してその觀念形態の特性を一般的に說明するかであつて、未だ眞にその本質を明らかにしその歷史的意味をつくすものとはなし難く、況してその教化の方法とその普及に關しては殆ど唯靈舍の組織やその分布、道話の盛況等を記述するにとゞまつて、それが具體的に教理の發展と如何に關係し、且つ如何なる順序を以て實現せられたか等の點に就ては何等說明するところがなかつた。これは一つは普及そのことの結果としてそれに關する直接的資料が

諸方に散在して何人にも容易く利用しえない狀態におかれてゐたからであつて、心學教化事業の本質とその意義といふが如き問題の如きも、一度かゝる資料の蒐集整理を俟つて後に更めて考察せらるべきものあるを思はせたのである。

現東京女子高等師範學校教授石川謙氏は早くよりこの點に着眼し、文部省社會教育局囑託の便宜を利用して、廣く全國にわたり舊心學臺舍の所在地に就いて遺存の資料を採訪し、有名無名の心學者のあとを訪ねてその日記や書簡をはじめ雜錄や手扣の類に至るまで殆ど餘すところなく網羅された。それらの一部は既に氏の前著「心學教化の本質並發達」、「近世社會教育史の研究」の中に整理して公表されたところであるが、今それら全部の綿密周到なる利用によつて新に「石門心學史の研究」菊判千四百頁の大著が完成された。

本書の內容は「心學思想並に教化方法の發達」「心學教化の普及」及び「諸藩の教育・教化施設と心學教化」の三編より成り、まづ心學といふ名稱の起源とそれは伴ふ學問觀念の變革より說き起して、學祖梅岩の思想體系を性と心との本質關係に求め、これが體認を主眼とする各人修養の教へが漸次庶民教化を主とするに至る過程と、それに隨伴して、その教化方法も次第に會輔や靜坐から離れて道話本位に移行く關係が明らかにされる。ついで心學教化の普及狀況に就てはまづ梅岩在世の時代並にその直後の時代を含む創始期を經て、手島堵庵を中心とする興隆時代が來りその獨特の統制と組織とによつて教勢の著しく伸張するものがあつたが、その後期に及んで中道道二、上河淇水兩人の對立によつてやがて關東關西二派分立の端が開け、ついで次の時代に入るや諸國の黌舍の新設せらるゝものいよ〳〵多きを加へると共に、その統制は破れて各地それ〴〵に異を稱するに至り、かくて時代が幕末に近づくにつれ秀れた心學者も漸く少くなり、遂に心學衰退の兆の覆ふべからざるものあるに至つた顚末が詳細に述べられてゐる。蓋この編は本書の根幹をなすものとして著者の最も力を注がれたところであらう、最初に述べた著者によつて始めて採訪された無數の新資料が自由自在に驅使されて殆どまた加ふべきものを見ないといへる。最後に諸藩の教育・教化施設と心學教化は同じく心學普及の事實を別個の立場より眺めたものであつて、卽ち普通に町人階級特有の道德なるが如く解せられてゐる心學が事實に於ては廣く武士階級にも普及してゐる事を幾多の事例に就いて證明し、轉じて時の爲政者たる幕府若しくは諸藩當事者の心學に對する態度を吟味し、心學の教化と藩立學校との關係をも究めようとしてゐる。これは要するに心學の教化が時代の教育全般の上に如何なる意義を有するかの問題に答へんとするものであつて、いはゞ全編の結論にも擬せられてゐるのであらう。

今、それらを通じて認められる著者の態度は能ふ限り廣く資料を索めると共に、得られたる資料はこれをコクメイに整理してなるべく圖表や地圖の形にとり纒めようとすることであつて、前後百五十年、五畿七道にわたる心學教化の消長起伏がそれによつて實に整然と敍述されてゐるのである。今後この方面の問題に關說

せんとする者の必ず參照すべき書となることを失はないであらう。（菊版一三六七頁、索引一三四頁、東京岩波書店發行、定價拾參圓）〔柴田實〕

シーボルト研究

日獨文化協會編

文政六年、クライエル、ケンフェル、トウンベリー等の後をうけて、長崎出島の和蘭商館の和蘭醫官として來朝したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが、單なる醫學者たるのみならず、博く歴史・地理・言語・人種・動植物等諸般の學問に通じ、その在留期間中に於て、恰も、黎明期にあつた所の我國洋學の熱心なる學徒達と深き交渉を持ち、彼等を教育し、その研究を助長し、日本に於ける洋學の發展史上に大なる足跡を殘すと共に、又彼自ら、日本の歴史・地理・動物・植物・言語・人種・風俗・制度・文物その他多方面にわたる研究を遂げて、その大著「日本」をはじめ、多くの書を著して之を歐洲に紹介した大なる功績は、永く忘るべからざる事である。明治以來、シーボルトに關する研究は既に多くなされ、又、彼の著作もかなり多く出版されてゐる。然し尚、海外にある文獻資料にして研究未完のものが少なからずあつたのである。かゝる時、昭和九年の春、伯林の日本學會長前駐日大使ウヰルヘルム・ゾルフ氏の好意によつて、同學會所有のシーボルトに關する文獻資料の内三百餘點を東京の日獨文化協會が借受けることが出來た。その文獻は、東京帝國大學圖書館内に設けられた「シーボルト文獻研究室」に保管され、昭和十年四月には、東京上野の科學博物館内で「シーボルト資料展覽會」が開催されて、それらの資料が一般に公開される一方、同研究室に於ては、入澤達吉博士を研究委員長とし、各專門の學者がそれ〴〵の部門に就いて研究が進められたのである。この間約二年、同文獻資料は昭和十一年中に伯林に返送され、「シーボルト文獻研究室」も同年三月閉鎖されたが、今度、その各擔當部分に於ける研究の結果が記述され、一書に取纒められのが本書である。本書所載の研究報告及びその執筆者は、次の如くである。

言語學史上におけるシーボルト先生……新村　出
大全早引節用集……入澤　達吉
鳴瀧塾……黒田　源次
門人がシーボルトに提供したる蘭語論文の研究……緒方富雄・大鳥蘭三郎・大久保利謙・箭内健次
シーボルトの第一回渡來の使命と彼の日本研究特に日蘭貿易の檢討について……板澤　武雄
シーボルト先生のアイヌ語研究……黒田　源次
シーボルト先生とアイヌ語學……金田一京助
シーボルト作成の地圖……蘆田伊人・箭内健次
シーボルトと日本に於ける西洋醫學……大鳥蘭三郎
Plantae Sieboldianae. A Reviewed Enumeration of the Japanese Plants Collected and Described by Dr. PH. FR.